

bonobos ニューアルバム『2 3 区』リリース記念 オフィシャル・ウルトラ・ハイパー・ロング・インタビュー



Interview & Words : 加藤将太 (OVER THE MOUNTAIN / CONTRAST)

新メンバーに小池龍平（ギター）、田中佑司（キーボード）、梅本浩亘（ドラム）を迎えて、再び5人編成に戻った bonobos。その新体制をワンマンライブとして初披露したリキッドルームのライブは、新曲を引っ提げて最新形の bonobos を提示し、バンドのこれからの期待値を高めるものだった。

そんな目下ブランニューモードにある bonobos より、前作『HYPER FOLK』から2年半振りとなるニューアルバム『2 3 区』が届けられた。ダブをベースに更新し続けてきた独自の音楽性は、今作ではアーバンかつメロウなサウンドスケープが際立ち、5人のスキルとセンス、そしてグルーヴがはっきりと表れている。新メンバーの加入によって、新たに辿り着いた境地とは。オフィシャルインタビューだからこそそのボリュームと切り口で、新生 bonobos の核に迫る。

課題は多くもベストを尽くした、新体制初のワンマンライブ

まずは新体制の bonobos をワンマンライブとして初披露の舞台となった、2016年5月14日のリキッドルームでのライブ『BRAND NEW!!!!!!』を振り返りたいんですが、あの日のライブを観ていた一人としては、お客さんに対して『2 3 区』に収録されている新曲の反応がめちゃくちゃ良かったように感じました。これからの bonobos がさらに楽しみになったライブだったと思っていて、皆さんはどんな感触がありましたか？

蔡：『2 3 区』に向けての準備段階のひとつではありましたよね。辻くんが辞めてウメが加入して、また完全にバンドらしさを取り戻したというか。同時に「ここからやるぞというフレッシュな気持ちになれたライブだったかな。メンバーそれぞれが、bonobos のこれからに対して期待感を感じたことによる緊張感があったのかもしれない。

森本：新曲を3曲（「葡萄の森」「Cruisin' Cruisin'」「Hello innocence）やったんだよね。でも、バンドとしては力みもあったし、十分に噛み合えていなかったライブでしたね（苦笑）。演奏的には、その次にやった北海道のライブのほうが全然良かったですね。

小池：正直にいうと、ワンマンに向けてのリハーサルが十分に出来なかったと思う。どうしても、新曲に比重が増えるじゃないですか。去年いろいろとフェスに出た経験から、元の曲はもっと良い演奏をしていたと思うんですけど、僕も完成度でいえば、もうちょっと出来たかなという気持ちはあるかな。ただ、その中でもベストは尽くせたと思う。

田中：僕は妙な緊張感があって、「Hello innocence」のアタマで僕がいきなりズッコケるという事件がありましたよね（苦笑）。それに伴って演奏に雪崩が起きてしまったっていう。ライブのことを振り返ると「申し訳ない！」という気持ちもあったりしますが、僕も龍平さんと同じで、今までの曲に対してはしっかりとパフォーマンスできていたと思います。新曲に関しては、あそこで失敗を経験しておいてよかった（苦笑）。

蔡：なんか反省会みたいになってきたな（笑）。

でも、新体制でのワンマンをお披露目できた、レコーディング前に最新モードの bonobos による新曲も届けられて、新しいアルバムへの期待感を持ってもらえたというのが何よりも大きいと思うんです。

蔡：うん、そうですね。「Cruisin' Cruisin'」はメンバーにデモを聴いてもらった時点で、次のアルバムのリードになるかもしれないような話はしていた気がするし、お客さんもこういうアプローチの曲が聴きたいのかもなという思いもありましたね。そういう意味では、美味しい料理を作るために食材を並べて、この食材が今からどう料理されるんだという感じのライブだったなと思います。

小池：もう遥か昔のように感じるね。とにかくレコーディングが濃すぎて激動の日々だったから、レコーディングがめっちゃ記憶に残ってる。10日くらい滞在した中で、俺は外出した時間は3分くらいだからね。

小淵沢から心機一転、北海道にて行ったレコーディング合宿

ちょうどレコーディングの話に移りましたが、今回は『ULTRA』『HYPERFOLK』を録音した小淵沢ではなくて、札幌の郊外にある芸森スタジオでレコーディングしているんですよね。山梨から一気に北の国に飛んだ理由としては何が大きいんでしょうか。

蔡：これにはいろいろな要素があって。良い卓と良いマイクがある、ハイエンドクラスのスタジオで録りたいなという気持ちがあったんですよ。芸森スタジオは4年前のライジングサン（RISING SUN ROCK FESTIVAL in EZO）に出たときの帰りに、芸森スタジオを管理している人から是非下見してきてほしいと言っていて、見学に行ったんですよ。そのときは小淵沢で録るというモードだったけど、天井が高くてオーケストラまで行かずとも管弦とかすごくいいものが録れそうだな

と。もちろん小淵沢はすごくいい環境でエンジニアの美濃さん（美濃隆章、toe）が持ってきてくれるビンテージの機材もすごくいいんです。でも、また5人になってバンドらしくなった、今のbonobosのアルバムを芸森で記録したかった。それで今回のアルバムの曲と合うだろうということで、エンジニアもbonobosの『electlyric』と『あ、うん』を録ってくれた吉村健一さんと久々にやることになって。

なるほど。場所は小淵沢から札幌に変わりましたが、今回も合宿レコーディングでした。環境との相性はもちろんですけど、『23区』という素晴らしいアルバムは合宿だからこそ完成したアルバムだと思っています。

蔡：合宿レコーディングってやったことある？

田中：いや、僕はなかったですね。

小池：俺は合宿の経験はあるけど、こんなに長いのははじめてだった（笑）。長くても4,5泊くらいだったかな。

田中：長い滞在の人で僕と蔡さんが2週間、ウメが短くて8日だった。

蔡：スケジュールは完全に押したけどね（笑）。その分、音色を探すとか歌以外の部分にはかなり手間ひまを掛けられたかな。

田中：今回はすごく曲が難しかったから、全てがスムーズにはいかなかったですよ。

小池：自分のことに関して言えばそうだね。俺は今回合宿じゃなかったら出来なかったなと思っていて。さっきスタジオから出る時間が3分くらいしかなかったと言いましたが、普段は空き時間があればいくらでも遊びに行くタイプなんです。でも、今回は本当に1日24時間の中で寝る時間以外はずっとギターを触っていました。皆がそれぞれのパートをレコーディングしているところにも立ち会わず、ずっと練習してやっと出来たくらいに。自分のギターの技術はさることながら曲が難しかったですね。だから俺はホテル泊ではなくて夜でも音が出せる環境で本当によかったなと。ゲロ吐きそうなくらいにキツかったけど（笑）、その分めちゃくちゃいいものができたと思っているから。合宿の意味が本当にあって、全部が良い方向に作用しましたね。

梅本：僕は龍平さんの横の部屋やったんですけど、本当にずっと弾いてましたよね。

小池：え、聴こえてたの？ しかもwi-fiが遠い部屋だったから、エロ動画とかも観られないくらいギターに没頭するしかないストイックな環境だったからね（笑）。自分のレコーディングが終わったときには酒を飲みまくったけど、それまではほとんど飲まなかったし。ウメはいいやつだから皆のコーディングを見守っていたんですよ。俺だったら絶対にすすきのに行ってただろうな（笑）。

私はウメだからできるという思いが強い（森本）

bonobos は自分の知らない世界を広げてくれた（小池）

新体制ということでメンバーが変わると、それに伴って曲の雰囲気も変わりますよね。バンドは生き物なんだなということを、bonobos オリジナルメンバーの蔡さんと夏子さんは特に感じているんじゃないかなと。

蔡：bonobos の音楽はフレーズをなぞっていれば OK というものではないので、グルーヴを出さないと成立しない曲が多いんですよ。みんなが楽曲の中でどういう役割なのかをある程度感じながら演奏してくれているなと思いましたね。以前はそれに対するストレスがあったけど、今の5人になって当初の予想よりも先の風景が見えているというか。この5人ならば、もっと遠くに行けるなということを感じますね。

『23区』を語る上で新メンバーのプレイビリティは欠かせない要素だと思っていて。蔡さんの視点からそれぞれの特徴をプレゼンしてもらえますか？

蔡：まずウメは、俺が bonobos を始めてから理想のリズム隊のサウンドがはっきりとしてきて、ウメによってバンドを支えるボトムとしてずっと追い求めていた理想像にかなり近づいたなという感じがしますね。ウメは基本的に演奏がヨレないので、1曲を通して緊張感が途切れない。俺が思うドラムってハイハットが一番前にあって、その次にキック、曲によってスネアという感じなんですけど、ベースはキックとベタッとくっ付いていて、キックの余韻とかの部分でベースと一緒に作るというか。それが連続していくと、重いのにダルくないグルーヴになるというイメージをずっと持っていて。それに近づきつつあるなと思わせてくれる男です。たまに元々のファンクバンドの癖が出ますね（笑）。森本さんとウメの相性がすごくいいんですよ。

森本：私はずっと同じベースを弾いているつもりなんですけど、ベースよりもドラムの方が演奏の支配感が強いので、私がいくら音符を切ろうがグルーヴを出そうが、ドラムがそれを感じてくれないと全然グルーヴにならないんです。その点、ウメは本当に自分が出したい音にハットでもキックでもスネアでも太鼓の音の長さまで、全部で合わせてくれる。私のグルーヴを一切邪魔しないのがすごいと思います。

梅本：いやいや、僕は常に精一杯ですよ。

森本：でも、精一杯コントロールしているよね？ じゃないと絶対に合わないから。

田中：たしかに僕と二人きりになったときに、ウメは「一生懸命になる瞬間が多い」って言ってました。ウメはなっちゃんに対して、いい意味で何も感じないんじゃないかな。

梅本：普通はドラムに対して遅れていくベースが多いんですけど、なっちゃんはずっとドラムに引っ掛かるんですよ。「Late Summer Dawn」のラストで、ドラムが抜けた後にベースだけになるじゃな

いですか。そこにまたドラムが入って。特にあそこがすごいんですよ。

森本：私はウメだからできるという思いが強いんですよ。

蔡：森本さんのプレイ自体は今までとあまり変わっていないのかもしれないけど、よりタイトに聴こえるようになっている気がする。ひとりで今までほとんどグルーヴを作ってきた人なので、何の文句もないんだけど

田中：僕にはなっちゃんの美学みたいなものがすごくわかるんです。

森本：そうなんです。それが伝わるのがすごく嬉しい。

田中：例えば、あるコードを弾いたときに、「え、その音をチョイスするの？」という衝撃からスタートですよ。なっちゃんのベースは、知らないうちに涙が伝ってくるという感覚がすごくあって。こんな人いないです、本当に。

森本：私は基礎がホンマにないから。佑司が出会ったミュージシャンの中で一番、出したいグルーヴも美学もわかってくれてるのかも知れない。

龍平さんはどうですか？

蔡：龍平は辻くんが連れてきてくれたんですよ。すごく良いギタリストだからということでスタジオに入って。それで、やっぱりすごくいいギタリストだった。俺はそのときに龍平のことをジャズギタリストだと思っていたんですよ。そしたらアコギを弾く人でエレキギターをほとんど持っていなかったっていう。「俺はエレキギターなんか…」なんて言われるかなと思ったんだけど、嬉しいことにエレキにのめり込んでくれて。

小池：エフェクターボードを揃えたりしたからね（笑）。

蔡：龍平が面白いのは、エレキなのに爪で弾くっていうところで。ピックで弾くのとは全然音の出し方も違うし、普通ならばできないことをやるんですよ。bonobos初期のギターにはコジロウがいて、コジロウのギターとやっている音楽とのミスマッチが良い部分であったんだけど、普通のエレキギターではないギターのほうが合う曲が多いなと思っていた部分もあって。それは龍平が入ったことでひとつの答えになったと思う。俺がbonobosを始める以前に、ひとりで宅録をしていたときに思っていたイメージとして、モダンジャズのバンドをベースにダブミキサーがいる、ジャズをもとにダブをやるみたいなイメージが最初にあったんです。そんなバンドができたらかっこいいなと思っていた当時のことを、龍平が入ったことによって思い出しましたね。ダブなんだけど、ジャマイカよりはアメリカのヒップホップ、R&B、ジャズの要素が入ったダブバンドになったというか。

蔡：そうそう。そういったインスピレーションを受けたと同時に、龍平は bonobos みたいなバンドが似合っている人だなと思いました。演奏として甘めのニュアンスも出せるけど基本的には硬派で渋い。

小池：俺は 30 代を超えてからは楽器としてクラシックギターにすごくハマって。いかに丁寧に楽器を鳴らすかということにハマっていたときに bonobos の話をもらったんです。最初はもちろん戸惑いもありましたけど、今では蔡くん以上に俺のほうが享受しているものがあるというか。去年はフェスとか、ああいう大勢のオーディエンスの前でみんなが躍るようなシチュエーションで音楽をやることはほとんどなかったのが、結構人生を大きく変えてくれるような変化でしたね。bonobos は自分の知らない世界を広げてくれました。

龍平さんは、畠山美由紀さんやアン・サリーさんのステージでギターを弾いている印象が強かったので、たしかに bonobos への加入は意外でした。

小池：全然違いますよね。俺は気持ちよくなりたくて音楽をやっているんですけど、bonobos は快樂への持っていき方が全然違うなって感じています。俺はバンドをどちらかというとすごく馬鹿にしていたというか（苦笑）。俺には、あまのじゃくみたいに捻くれたところがあるんですけど、そういうものが bonobos に入ったことで全部ひっくり返ったというか。バンドってめちゃくちゃ楽しいし、嬉しい気持ちになりますね。俺を今のステージに導いてくれたみんなにすごく感謝しています。

当事者じゃない僕でもめちゃくちゃ嬉しい言葉ですね…。

蔡：そう言ってもらえて、忠浩感激！

佑司は鍵盤・打楽器奏者、テックとしても一流。ただ性格が終わっている（蔡）

最後は佑司さんです。

蔡：いや、佑司は別に…。

田中：ちょっと！

蔡：佑司はくるりに入る前から、辻くんや bonobos をサポートしてくれている武嶋くん（武嶋聡）からその噂を聞いていて。「鍵盤を弾けるし、パーカッションもドラムも叩けるマルチなやつがいる。ただ性格が終わっていると。」

田中：これね、本当に言われてたんですよ（笑）。



蔡：辻くんが佑司の連絡先を知っているから一回セッションをやってみようとなって。当時は『ULTRA』と『HYPER FOLK』を出す前だったけど、あの方向を少し模索したかったので、佑司みたいなプレイヤーが入ると随分変わるだろうなと思ったんですよ。当時の俺はライブハウスでライブをやることに飽き飽きしていた時期だったので、それがきっかけで「レッツゴー 3 匹を始めたんですけど、そのタイミングでいわゆるロックバンドじゃないプレイヤーを欲していて。そしたら、性格は置いといたとして、話を聞く限りでは佑司がドンピシャな人材だった。すぐにセッションに誘おうとしたんだけど、辻くんが全然乗り気じゃなかったんですよ。

田中：辻くんに言われたんですけど、「俺はあまり人のことを嫌いにならないんだけど、あのときの佑司くんはホンマに嫌いだった」って（苦笑）。

一同：爆笑

蔡：辻くんは、佑司はちょっと自分に似ているところがあると言っていて。それなら別にいいでしょうと思ったんだけどね。少々連絡した頃には、佑司がくるりに加入することが決まっていて、辻くんはすげえ嬉しそうにしている、「こいつ…って思ったけど、ところが佑司は 1 年もしないうちにくるりを離れて（笑）。「よし、きた！」と思って、すぐに連絡してもらったんです。鍵盤と鉄琴でセッションして、「Go Symphony」がすごくハマっていたんですよ。その場でリミックスする感じがすごくハマっていて、是非 bonobos をサポートしてもらいたいなとなって。結局はそこからしばらく空いて、龍平と同じタイミングで佑司にも入ってもらったんだよね。

楽器を複数こなせるマルチプレイヤーという点は、誰が見ても佑司さんの一番の特徴ですね。

蔡：元々、佑司は打楽器奏者なので、リズムに対しては素晴らしいタイム感がある。キーボーディストとしては変なブレがなくて情緒があるように弾ける。俺は完全にドラマーよりも鍵盤奏者として非常に高く評価しています。

佑司さんは、今回のレコーディングでドラムテックもやっています。

田中：これは楽しい時間でしたよ。

蔡：ご褒美みたいなもんですよ。レコーディングでドラムを叩けない代わりに好きなだけ叩いていいよっていう。

田中：ウメちゃんがそれを許してくれたことが嬉しかったんですよ。

蔡：いや、怒ってたよ。

田中：は？ 怒ってた？！

梅本：でも、ホンマにすごいんですよ。

佑司：最初にウメちゃんは僕のドラムを使ってライブに出ていたんです。「自分の楽器を使ったほうがいいんじゃない？」と提案したときに「僕の楽器は鳴らないから使わんほうがいい」って言ったんですよ。それでも調整してスタジオに持って行ったら、めっちゃ鳴るようになって。

梅本：生まれ変わって帰ってきたんですよ、ドラムが。

蔡：本当は買い換えたんでしょう？

田中：違う！ まずそこで信用してもらえたという第一段階があって、今回のレコーディングに関しては、どういうヘッドを張るとかチョイスを持ち寄りながら作りたかったので、なんとなく妄想して、こんな感じの音作りはどうかなというものを提案しました。

蔡：佑司はテックとしても一流なんですよ。イメージの音に持って行くのが最短距離ですごく速い。意図も伝わるし説明もわかりやすい。

梅本：スカポンタスでも何人か手伝ってもらったんですけどダントツですね。

小池：すごかったよね、たしかに。

蔡：新しい響きを bonobos に持ってきてくれるんですよ。俺も作曲をするけど、基本的にアカデミックな音楽教育を受けてきていないので、そういう意味では、佑司が出す音は説得力も響きもある。そのアカデミックな感じはすごく支えになっていますね。

田中：ありがとうございます！

蔡：佑司は何かを蘇らせる特殊能力を得たのかもしれない。ドラムもそうだけど、終わっている性格にも魔法をかけて（笑）。ちなみに、かわいい女の子がいますとすごく調子に乗ります。メンバーとのコミュニケーションが完全に二の次になって、その途端にすごく嫌な感じになる（笑）。絶えずモテ系なんですよ。完全にアーバンでチャラくて、仮面ライダーでいうとアマゾンですよ。言葉が通じなさそうな野生児だけど、音楽的にはすごく信頼しています。

今まで、蔡くんが歌入りにプレッシャーを感じているシーンはなかった（森本）

メンバーが期待値以上の演奏をしてくれる中、逆に蔡さんは歌入れなどでプレッシャーを感じたりしなかったんですか？

蔡：めちゃめちゃ感じました。「台無しにしてるんじゃないかな、俺…」って何回も落ち込んで歌い直しましたね。やっぱり歌は曲の一番前に出てくるものだから、せっかくいい演奏をしてくれたのに、曲の魅力が俺の歌のせいで伝わらないなんて嫌ですし。

田中：これは僕らがなんとも言えないところですよ。フロントマンならではの悩みというかプレッシャーじゃないですか。最近バンドについて深く考えることがあって。ボーカリストやフロントマンはお客さんと一番近いところにいる接点だから、その人が気持ちよくなっていればお客さんもそうなんだろうという考えのもと、最善のチャホヤというか全力のサポートで蔡さんが気持ちよくなれるようにしたいなと思っていて。ライブ会場全体がハッピーになれるように。

小池：俺は、蔡くんの歌は最高だと思っていて。求めるものがすごく次元が高い人だけど、ダメなテイクすらイケてると思っていたから、そんな感じはしなかったですけどね。

梅本：僕は歌入りに立ち会えなかったけど、仮の段階でもかっこよかったですから。

森本：今までのアルバムレコーディングで蔡くんがそんな気分になっていたことはありませんね。歌入りにプレッシャーを感じているシーンは。

小池：そうなんだ。

森本：なんだったら、今までは「俺の歌さえ入ればあとはなんとかなるくらいの感じだったけど、今回はオケの出来があまりにもストイックにシビアでいいものだから、本当にそれを1ミリも崩さずにそのまま届けたかったんだと思う。「俺の歌によって良くなる」と言える感は1ミリもないくらいでした。

田中：それはつゆ知らずだった。

でも、今の bonobos はバンドとしての佇まいも演奏している音楽もかっこよくて、最強の布陣感がありますし。だからプレッシャーを感じるのは仕方ないような気がします。

蔡：デビュー当時から振り返っても、今はみんなのことを尊敬して音楽をやれていて。それまでは思いどおりの演奏にならないストレスというか。フレーズやリズムパターンを作ったりして、構造や構築で楽曲をなんとかしようと思っていたけど、それは今となってはどうでもよくて。メンバーの自由にやらしてもらったほうがいいなと思うし、逆に俺が追いつかなきゃなと思っているところです。こんなに安心感を得ながらバンドをやれているのははじめてじゃないかな。

新しい bonobos を楽しむためにブラックミュージックが必要だった

では、お待たせしました。やっと『2 3 区』の中身についてのインタビューです。『2 3 区』は『ULTRA』『HYPER FOLK』と続く 3 部作最後のアルバムにあたるんですよ。

蔡：たしかにそうなんですけど、当初構想していた 3 部作とは違うんですよ。元々はオーケストラと打ち込みだけのワントラックっぽいアルバムを作ろうとしていたんです。そのイメージは『HYPER FOLK』を作っているときからあって、組曲形式で 4 部構成にしようと思っていたんですよ。ワントラックといっても、いわゆる「LONG SEASON」みたいなものではなく、全体で交響曲になっているというか。

その構想は蔡さんと夏子さんと辻さんの 3 人編成だった時のものですよ？

蔡：そうそう。今はメンバーが 5 人いるし、リズム隊と俺しかいなかったときの構想を引き継いでも仕方がないから。でも、実際にそれ用のデモも割と前に送っていたんですよ。チャプター 1 から送って、最後のチャプターが「2 3 区」だったんです。本当は組曲用に作ったんだけど、良い曲だからということで軌道修正して。結果すごく良かったなと思っていて。『ULTRA』『HYPERFOLK』『2 3 区』となって、時間の流れや視点の変化が宇宙から自分が暮らす東京の街に変わったのは変化球ではあるけれども、これを 3 部作と言ってもいいのだろうかという気が少しはあります。

今の話を踏まえると、タイトル自体も『2 3 区』ではなかったということですか？

蔡：『2 3 区』というタイトルは最後の方で決まったんですよ。最初はもうちょっと宇宙ぽく「オンスフィアメイキング」というタイトルにしようと思っていました。アルキメデスが記録して残したとされているプラネタリウムの設計図、直訳すると球体（天体、惑星）の作り方の説明書を意味するんだけど、『ULTRA』『HYPER FOLK』と来た流れがタイトルをそれにすることによって出来ると考えていたものの、そもそも分かりにくいしどうしようかなと思って（笑）。「2 3 区」という曲があるから、これをタイトルにしたらどうだろうと考え直して。アルバムのリード曲としては「Cruisin' Cruisin'」と「2 3 区」もなり得るから、どちらかを選ぶのにせめぎ合っていたんですね。

たしかに。どちらもリード曲として申し分ないから究極の選択ですね。

蔡：結局、リード曲は「Cruisin' Cruisin'」になったけど、アルバムタイトルを『2 3 区』にすることで両方がリード曲という認識になったというか。『2 3 区』は感覚としてアルバム全体を表しているし、後付けだとしても、アルバムをまとめてくれるタイトルだなと思いましたね。

自分たちが暮らしている、眺めている東京を、23 区外の生活の悲哀や寂しさも含めて、ひとつの音にして昇華したかったんです。そうすることによって、東京という街をもう一度愛するという意味を含めました。

小池：たしかに郊外感もある。高速道路に乗っていても、街に着いて聴いていても違和感のないアルバムだね。

サウンドスケープとして挙げられるアーバン、ネオソウルの要素が都会と結びつきますが、そういったメロウで艶のあるニュアンスを盛り込むにあたっては、やはり「THANK YOU FOR THE MUSIC」のリアレンジがきっかけになっているんでしょうか？

蔡：そうですね。このメンバーになって、リハをしたりフェスに出たり、「THANK YOU FOR THE MUSIC」のリアレンジをやったり、その積み重ねの中で自然に辿り着いた感じですね。その間にメンバーと聴いている音楽の話をして、ロバート・グラスパーやディアンジェロとかのブラックミュージックを分析することもあったけど、トレンドを追うというよりは、新しい bonobos の音楽を楽しむために必要だったという感じですね。

小池：ブラックミュージックは知らずのうちに意識していたかもしれないね。俺も久々にディアンジェロとかめちゃくちゃ聴き直したし。メンバーみんなの土台にブラックミュージックがあるんですよ。ウメはファンクだし、佑司はヒップホップが好きだし。無理やり意識していたのではなく、体に入っていたものが自然と出てきたというか。いい感じでフュージョンできたよね。

田中：「THANK YOU FOR THE MUSIC」のリアレンジが成功したときに、みんなで「やったじゃん！」みたいな手応えがあったんですよ。

森本：うん、生まれ変わったようなね。

田中：この二人があんなにやりきった音楽をまたやりたくなっているのを見て、その時点で既にフラグが立っていて。そこからの流れで蔡さんが作ったアルバム用の曲を聴いて、なるほどねと納得できました。

いろいろなものが混ざった、聴いたことがない音楽を作りたい

『2 3 区』はサウンドとして単純に気持ちいいし、聴きやすいですし、今までで最も間口の広いアルバムになったなと感じていて。「今の bonobos、めちゃくちゃかっこいいよ」とドヤ顔でプレゼンできるアルバムだと思っています。

田中：ちなみにアルバムでどの曲が好きですか？

ダントツで「2 3 区」ですね。メロウでポップで多幸感もある、個人的には bonobos 史上最高の曲だと思います。オフィシャルインタビューならではの切り口で、皆さんの思い出のある曲についても聞かせてもらえますか？

田中：僕は「Hello innocence」ですね。北海道のレコーディングが終わって都内でミックスしている最中に、蔡さんとイントロ部分にシンセでアレンジをしたという思い出も込みで。アフリカンビートで3拍子。そこからハウスになる展開がすごくて、単純にこんな曲を聴いたことがない。でも、ライブでどうなるんだってという期待感と不安感が入り混じる曲です（笑）。

蔡：恐ろしいよね（笑）。

田中：でも聴いているとアガるっていう。この二人（森本と梅本）がすごいんですよ。完全にアフリカ人でしょう。

森本・梅本：あ、ありがとうございます。

小池：俺は「2 3 区」ですかね。正直、蔡くんからデモをもらった時点ではピンときていなくて。そういう意味では「Late Summer Dawn」も後からすごく好きになった曲ですけど、「2 3 区」に限っていえば、詞が完成してから一気に感動が深まったというか。俺はそんなに歌詞を聞くほうではないんですけど、「2 3 区」の「俺をハイにしてくれ」という一節が好きすぎて。それを蔡くんが病み上がりで絞り出すように歌ったテイクがものすごく良くて。その感じをアルバムにすごく残したくて、この曲はミックスのときにみんなで最後まであれこれ話したんだけど、特に自分の思い出を伝えましたね。

梅本：僕は「グッドナイト」ですかね。ずっと続けられるビートで、録っていた時点ですごく気持ち良くなれた曲やなということで。曲が4拍子で進んでいくんですけど、エンディングでは3拍子になるアイデアもよかった。

森本：ウメちゃん、録り終わった後に「鳥肌立った〜」って言ってたよね。

田中：蔡さんは「奇跡のテイクだ」って言ってましたよね。

森本：私はそうだな…。「2 3 区」はデモの段階で bonobos 史上最強の名曲だなと確信しましたね。

小池：へえ、俺と逆だね。

森本：ベーシストの観点でいいますと、「東京気象組曲」ですかね。

蔡：これはアレンジが楽しかったなあ。この曲が唯一「HYPER FOLK」からの流れを引き継いでいますね、チェンバーポップ感がある。

森本：レゲエのベースの弾き方ってホンマに鬼弾きなんですよ。音の減衰を許さなくて、音が切れるときは自分の指でミュートするっていう。今回の曲はどれも難しいんですけど、その弾き方での「東京気象組曲」はレゲエベースでなければサラッと弾けるのかもしれないですけど、特に大変で非常に満足のいく録音でしたね。

小池：なっちゃんの基本的な奏法は、速いパッセージを弾くよりも太さを追求するアポヤンドっていう弾き方なんですよ。もはや、それしかできない体になってるんじゃないかな。俺にとってはそれが衝撃だった。ロマンに近いくらいアホな世界というか（笑）。

蔡：ブレーキとハンドルが壊れた F1 マシンみたいな感じだよね。フレーズ的にはフュージョンとかをスラップで弾く人の音の跳躍なんですよ。

小池：そうそう。「それってアポヤンドだよね？」っていつも確認したくなるほど無茶なことをやっていて。それが特にこの曲はすごい。

森本：それはやっぱり、基礎がホンマにない人だから…。

作曲者の蔡さんとしてはどの曲ですか？

蔡：俺はやっぱりどれもだけど、「Cruisin' Cruisin'」は曲的にもよくできたし、コード進行の途中にややこしいところがあるよね？

田中：というか、すごく近いもののコードが思いもしない組み合わせでやってくるんですよ。すごくキャッチーに聴こえるんだけど何か引っかかる。それに対して流れるように歌うのは蔡さんと bonobos にしかできないんじゃないかな。

蔡：自分で曲を書いて、基本的な進行もアレンジも作って、それを表現するときにそれぞれ変換して、後半部分のコードを変えたりして一番うまくまとまったのが「Cruisin' Cruisin'」、そして「2 3 区」だと思いますね。こんな曲を作りたいなと思っていたので。ある程度はブラックミュージックをある程度意識しているんだけど、コード 4 つで循環っていうのは少ないし、

そういう意味では少し離れていて、いろいろな要素が入っている。そういえば、あれ聴いた？
オリンピック閉会式でやった「君が代」のリアレンジ。

田中：あれ、すごかったですよね！

蔡：あれを聴いて、編曲した人のやりたいことがわかる気がするんだよね。リハーモライズして、いろいろな要素が混ざり合った、どこにもない音楽に聴こえる。ブルガリアのコーラス隊が入って、すごく不思議な「君が代」になっている。

どこか懐かしいのに近未来感もある、今まで聴いたことのない「君が代」でした。

蔡：俺はアルバムを作るときに、それをいつも意識しているんですね。何かの様式に合わせないというか。たとえば、レゲエとかヒップホップとか R&B には様式があるから、再現性を求めてストイックにマナーを追求すればいいけど、自分がやるならばそこを追求しても楽しいとは思えなくて。いろいろなものが混ざった、聴いたことがない音楽を作りたい。全然違う国のメロディとリズムを合わせたときに、新しいのに別の国の何かに似ている。それをやっていくと、音楽がどうやって、同時に人がどうやって海を渡ってきたのかということと偶然重なって、いろいろな気づきがあったりする。大袈裟に言えば、リアリティを持って歴史を捉え直すことと感覚的には同じというか。他のことにも気づくことが多いというのは、ものづくりの醍醐味だと思いますね。

bonobos のパブリックイメージとは

さっき蔡さんが言った「いろいろなものが混ざった、聴いたことがない音楽」は bonobos 最大の特徴で、それは『オリハルコン日和』以降、アルバムを積み重ねるごとに顕著だと思うんですね。それなのに、いつまでも” ゆるい” とか”” ほんわか” みたいなイメージが先行しているような気がして。その理由はなんだろうと考えたら、フェスが増え始めたタイミングと「THANK YOU FOR THE MUSIC」がリンクして、bonobos の認知が広まったことが要因のひとつにあると思うんです。ただ、アップデートされていく bonobos が十分に伝わりきっていないのが、いちファンとしてはジレンマで。Wikipedia に書かれてある “独自のゆったりとした音楽性” も修正したいくらいなんですよ。

蔡：(笑) いま加藤くんが言ってくれたことが当てはまると思う。加えて、最近は作品をリリースするペースがゆっくりなので、『ULTRA』をリリースして少なくとも 1 年半で「HYPER FOLK」を出していたら、また受け取る印象は随分違ったものだったのかもなという気は少しだけあって。2 年半とか空いているから、リセットされているのかもしれない。そういう意味では、もう少し自分たちのスピード感を上げていかなきゃいけないなと思ってます。

もっと早くに次作のリリースを？

蔡：そうすると、また少し変わってくるんじゃないかなと。「THANK YOU FOR THE MUSIC」も随分とライブでやらなかった時期があって。ワンマンでやらなくても、ファンの人たちがそれを気にせずに最後まで楽しんでもらえるようになってきたので、少なくともワンマンに来てくれるお客さんには bonobos の最新形が伝わっていると思うんですよ。でも、出会い頭に観てくれるお客さんには、まだ「THANK YOU FOR THE MUSIC」のイメージがあるのかもしれない。そう考えても、「THANK YOU FOR THE MUSIC」をリアレンジしたのはすごくよかった。

田中：今年すごく悔やまれるのはレコーディング時期がフェスと被っていたんですよ。去年の大阪の『音泉魂（OTODAMA）』に出たときに、あれだけの多くの人たちに観てもらって、「THANK YOU FOR THE MUSIC」のリアレンジも披露できたんですよ。bonobos が動いているぞと予感させられるパフォーマンスを示せたから、その流れで今年もフェスに出られたらよかったなと、個人的に悔しい思いはありました。

夏子さんはどうですか？

森本：それ以前は、何をやっても bonobos はゆるいとかほんわかとかね。何をやってもフィッシュマンズと言われるのもつらかったし。でも、龍ちゃんと佑司くんが入ってから伝わり方が変わったなというのは肌で感じていて。今回のアルバムが「ゆるい」と言われたらびっくりですね。

蔡：龍平と佑司が入ったことによって、その場で表現できることがすごく増えたんですよ。具体的には、サンプラーを使う割合が減ってきていて。そうすることで、ライブの波の作り方がよくなったというか。それと、ドラムがウメになってからはウメにパッドを叩かせるわけにはいかないし。みんなの体つきがゆるいのは仕方ないけど、全員が病的に痩せていたら、ほんわかとか言われないうのかな（笑）。

改めて、『23区』はこのメンバーだからこそ成立した素晴らしいアルバムだと思いますよ。このインタビューで話してくれた個々の想い、個性とスキルが凝縮されています。とにかく反応が楽しみです。

蔡：ライブの再現がまた大変なんですけどね（笑）。



田中：曲によっては要所で蔡さんが3人、僕と龍平さんが4人になるような箇所がありますからね。これを再現するのは…。

蔡：特に「東京気象組曲」はライブのことを考えずに好き勝手やったからね。ちょうどアレンジ作っているときに『あしたのジョー2』を観直していたんですよ。荒木一郎さんが劇中の音楽を担当していて、すごくカッコいいんですよね。「東京気象組曲」はあれにかなり刺激を受けました。

10月からのリリースツアー、めちゃくちゃ楽しみにしています。

蔡：まだ確定ではないけど、完全5人だけでやりきりたいね。

森本：この5人のグルーブがいいからね。

蔡：もし管に入ってもらうならば、Billboardみたいな場所で改めてそれ用のセットでやりたい。みんなでドレスアップなんかしちゃって。次のアルバムもできれば来年には録音して、また野音とかでもライブをやりたいっすね。

bonobos ワンマンツアー 2016 ハチャメチャ☆くる～じんぐ！

10.02 SUN 北海道 札幌 Sound Lab mole
OPEN 17:30 START 18:00 INFO:WESS 011-614-9999

10.08 SAT 宮城 仙台 LIVE HOUSE enn 2nd
OPEN 17:30 START 18:00 INFO:ノースロードミュージック 022-256-1000

10.15 SAT 岡山 岡山 YEBISU YA PRO
OPEN 17:30 START 18:00 INFO:夢番地 岡山 086-231-3531

10.16 SUN 福岡 福岡 ROOMS
OPEN 17:30 START 18:00 INFO:BEA 092-712-4221

10.22 SAT 大阪 梅田 Shangri-La
OPEN 17:15 START 18:00 INFO:清水音泉 06-6357-3666

10.23 SUN 愛知 名古屋 CLUB QUATTRO
OPEN 17:15 START 18:00 INFO:JAILHOUSE 052-936-6041

10.30 SUN 東京 恵比寿 LIQUIDROOM
OPEN 17:15 START 18:00 INFO:HOT STUFF PROMOTION 03-5720-9999

前売 ¥3,900 (+ドリンク代)	チケット：各プレイガイドにて絶賛販売中
--------------------	---------------------